

つながりとバランスで成り立つ多様性。

童謡でもお馴染みのメダカが、今や絶滅危惧種であると聞いて、驚く日本人は多いはずだ。多様な生き物が、絶妙なバランスの上で共存しているこの地球で、メダカ以外にも、恐るべきスピードで「種の絶滅」が進行している。「第6次大量絶滅」ともいわれるこの事態を引き起こしているのは、まぎれもなく人類。これまで5回の生命絶滅の危機は、火山の噴火や隕石の衝突などが原因だったが、今回の危機は人為的な環境破壊によるものだ。

ただ、だからこそ、人類は叡智を集め、多様性を守ろうともしている。昨年、名古屋で開催された「生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)」は、まさにそのための国際会議だった。

環境ジャーナリストである著者は、生物多様性を表すキーワードを「つながりとバランス」とし、多様性をめぐる現状を具体的な例を挙げながら、本書でや

さしく解説していく。「ミレニアム生態系評価」と言われてもピンと来ないが、「地球の健康診断」と言い換えてくれれば、よく分かる。

生物多様性がなぜ大切なのか、どうすれば守れるのか、COP10で決まったことは何だったのか、すべて本書で包括的に説明されている。普段の買い物で「エコラベル」を意識してみたり、「里山」や「農村」でのイベントに参加してみたり。本書で紹介されているちょっとしたことを始めることで、多様性ある世界が守られていく。



「私たちにたいせつな
生物多様性のはなし」

著：枝廣 淳子

かんき出版刊 1470円